

賀川豊彦における基督教倫理

竹 中 正 夫

おそらく日本におけるキリスト者と社会問題の関連において賀川豊彦ほど問題を広範な領域にわたって提示している存在はないであろう。貧民救済やセツツルメント事業に始まり、労働組合運動、社会主義運動、協同組合運動、農民組合運動、平和運動を中核として、「死線を越えて」などに代表される文学活動や芸術論を含み、「女性讚美と母性崇拜」などにみられる婦人解放運動への関心から、近著「宇宙の目的」にあらわされる宇宙論に至る広汎な領域に於てキリスト者と社会、信仰と文化の関連を明らかにしている。今日でこそ共同研究といった形で領域の異った者が相互の関連をもち交錯しあった分野にまたがる問題の多角的な検討の必要性を漸く認めつゝあるが、狭い特殊な領域に分化される傾向の強かった四、五十年前から総合的な視野に立って、広汎な領域にわたる考察と実践活動をなし続けていることは非常に注目すべき顕著なことであると思う。更に彼は単にそれらの広汎な領域にわたる課題を理論として取扱う丈でなく、具体的な実践活動の中に自らを参加せしむることによって、理論と実践を一つとしていることも見逃すことの出来ない特色である。ポール・ティリツヒは実存主義の特色の一つとして現実の具体的な状況を真摯に深く取り上げることが指摘し、マルクスは理論と実践の分離を取り除いた学者として実存主義者であったと言っているが、⁽¹⁾こうした観点からす

ると賀川豊彦の中にも実存主義的態度が流れていると言って差し支えないと思う。

これらの賀川豊彦の社会関心の包括性や実践的性格と共に、顕著な課題は、日本のキリスト教と社会のかゝわりにおいて、賀川豊彦が歩んで来た道は独自のものがあつたということである。キリスト教信仰にめざめて社会的活動に従事した人々は明治以来決して数少くなかつた。しかし、その多くの人々が必ずしも最後まで、キリスト教信仰と社会問題を一つの関連の中に一貫して把握し、実践に徹して来たとは言ひ難い点が多くある。例えば初期の労働組合運動や社会主義運動の中には、少からずのキリスト者がいたが、諸種の事情から或る者は教会を否定するのみならず、キリスト教信仰そのものも失つて唯物弁証法に立つ社会主義者となり、或る者は、両者の葛藤にあいそをつかして自然に親しむことに自己の平安を見出し、又或る者は、社会的活動の相対性や混沌さから遁れて、自己の福音の純粹性を保たんとする為に、教会又は精神的なサークルの内側に閉じ籠るに至つた。⁽²⁾ こうした中であつて、信仰と社会的活動を二分せず、又二者択一の形をとらずに、一貫してキリスト教信仰を保ちつつ、又はキリスト教信仰を保つ故に、社会の問題に関与して行つた点に賀川豊彦の存在が意味をもっていると思うのである。

それでは賀川豊彦においてキリスト教信仰と社会的活動はどういう結合をしているか、彼のキリスト教信仰の把握が社会的活動にいかなる関係をもっているか、という一連の課題が問題となつて来るのである。即ち賀川豊彦においてキリスト教倫理はいかに構成されているかという課題である。この小論が取り扱おうとしている課題は、広汎な領域における賀川豊彦の活動の叙述でもなく、又彼の辿つて来た道を年代史的に綴るのでなく、彼の思想と活動の根底となつているキリスト教倫理について考察をなすことにある。⁽³⁾

(1) Paul Tillich, "Existential Philosophy", *Journal of the History of Ideas*, V. (1944) pp. 45-70, "How Much Truth Is There in Karl Marx", Sept. 8, 1948, *Christian Century*, pp. 906-908.

(2) 森戸辰男氏の報告によると初期の社会運動の指導者中キリスト教の影響を受けたものは、一二人の回答者中約三〇%に及んでいる。そして彼らの七八%はキリスト教信仰を後に喪失していることが記されている。森戸辰男、日本におけるキリスト教と社会運動、一五八〜一五九頁

(3) 賀川豊彦についての評論、伝記は内外に数多くあるが、その多くは広範な分野に及ぶ彼の活動の平面的叙述が彼に心服する人々たちによって理想像化された評論伝記が多く、彼の思想と活動の根底にある神学的構造について分析をなしたものは極めて少ないのではないかと思う。

—

賀川豊彦は神学的課題の把握表現において決して組織的体系的になしているわけではない。彼は組織神学者ではなく、伝道者である。学者ではなく詩人である。冷徹な論理の中に啓示を体系化するのではなく、暖かい涙と共にうたいきる詩人的性格が彼には強い。

彼の英文の詩に涙について次の様にうたわれている。

Flow O my tears !
Well up and fall
O blood !
Sound of my inmost soul,
Dissolve in grief.....
For I have lost
The precious All
I offered God.

賀川豊彦における基督教倫理

賀川豊彦のおける基督教倫理

130

O tears,
Lift up your doleful voice,
For from the day
I turn to human love,
Oh, that my tears
Might overflow
The path by which
God fees from me!

Forgetting God,
His presence has
Departed from me....
And I know not where!
Tears of my heart
Quick! Quick!
Help me to capture him!
(1)

横山春一氏の賀川豊彦伝に斎藤潔氏が序にかえて「生命存在の像」という詩をかかげているが、その一節に

「彼の心は息ま^ふない、彼の手も停止しない

隣人の涙へ差出される心、

隣人の苦しみへ伸べられる手、

そのための彼の心は常に脹れ、彼の手は燃えている。

彼はよく泣く、男泣きだ

雄々しい涙だ 涙は紛々として花と散る

なみだの花吹雪のなかに 彼はじっと耐える。」⁽²⁾

又幾多の広汎な諸領域に及び活動の中で常に彼が心安らかなおもいを覚えるのは、伝道者としての働きであると思う。

しかし、このことは彼が神学的な思索や哲学的考察を排除したり軽視したりしたことをいさゝかも意味する

ものではない。過激な貧民窟の生活や多忙な社会活動のさなかであつて彼は読書に励み、思索をなし、多くの労作をあらわしている。⁽³⁾

賀川豊彦は明治学院及び神戸神学校に学び更に米国のプリンストン神学校に学んだという神学教育の経歴からして長老派の教会の中に育った人である。彼は長老派教会の伝統となつてゐる信条に対する高い評価に学ぶものが少くなかつたが、信仰を形式化された信条の中に固定化する信条主義の傾向に彼は極力反対した。賀川にとつては信仰は信条の事柄として靜的に把握されるに止まらない。彼は固定化された信条主義の危険を指摘して次の様に言つてゐる。

「今日多くの教会が贖罪愛を信条としてのみ守ることによつて平安を採たんとしている。私にとつては今日の状況は靜觀するにはあまりにも痛々しいものがある。基督教会によつて受け継がれてゐる信条や教理は贖罪愛を意識せる生活を説明する目的をもつたものでそれ以外の何ものでもない。」⁽⁴⁾

賀川豊彦にとつて宗教は教理、教説ではなく、具體的生き方となつてあらわれるものであつた。彼にとつては具體的な行動の中に滲透して来ない宗教は理解しがたいものであつた。この点に於いて彼は信仰と生活、宗教と倫理を二分する二元論に対して強く反対した。

この観点から彼は自己の宗教的集團の維持擴張にとらわれている制度的な宗教集團に強い批判をなしてゐる。一九三一年神・仏・基三教の宗教會議に於いて彼は宗教家が社会の現實に直面し愛の実踐に励むべきことを手きびしく説いてゐる。⁽⁵⁾

彼にとつては宗教は生きる道 (religion is a way of life)⁽⁶⁾ であり、キリストの十字架に於いて完全にあらわされ

た神の愛が彼の信仰の核心をなしている。

この世の課題から隔離された制度的な教会に対して批判的であつたが、彼は教会の中に留まり、伝道の業に教会を通して励んだ。この点は同じく制度的教会の欠陥に対して批判的であつた内村鑑三とは非常に対照的である。内村が後期に於いてキリスト再臨に力を注ぎ、聖書の研究による個人の覚醒に力を注いで行つたのに反し、賀川は、キリスト再臨よりもむしろ現実の社会の中に神の贖罪愛の内在を強調した。⁽⁷⁾ 神の愛について彼は次の様に述べている。

「愛は宇宙をつくる新らしい力である。愛は創造であり表現である。ローマ書五章八節に『しかし、まだ罪人であつた時、わたしたちのためにキリストが死んで下さつたことによつて、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。』とある様には神の表現であり又同時に愛は創造である。」⁽⁸⁾

すべての生の領域はこの神の愛の下にあり、神の愛は普遍的であり且つ内在的である。⁽⁹⁾ この世界における悲哀や苦難を身を以て体験しつつも彼の宇宙理解は極めて楽観的色彩が強い。彼は「宇宙は神の上衣である」⁽¹⁰⁾と呼び歴史を通して神の働きを論じている。⁽¹¹⁾

しかしこのことは賀川豊彦の神観が汎神論的であるといふことにならない。彼はキリストにおいて顕わされた神の愛を信ずるのであつて、唯一神、人格神がその基調をなしていることは明らかである。

「人類はその時代より更に悪化した。ついに神が愛を受肉化身せしめ、その贖罪愛を通して發言なしたまうたのである。それがイエス・キリストである。このイエス・キリストの出現によつて、歴史は回転し、人類は更生の確約を得、魂は新生した。イエス・キリストを研究すればする程、知れば知る程信すれば信ずる程宇宙の神が人間の歴史の中に關涉していることを明ら

かに悟ることが出来る。いな、たとへば関渉してゐるのではない。宇宙を創造せし神は、あくまでも最も強き責任をとりたまひ、これを愛し、支へ、治め、導き救いたまうのである。⁽¹²⁾

こゝで明らかなのは、キリストが神の愛を具現した存在として把握され、それを通して神の全世界に及ぶ贖罪愛が理解されてゐることである。しかしこのことは直ちに彼の基督論が高度なものであるとは言い難い。⁽¹³⁾キリストが神の愛を顕現したということは未だに広義の表現であつて、イエス・キリストそのものが神であつたという告白とは異つてゐる。賀川豊彦の基督論の中に神の心即ち贖罪愛をあらわしたイエス・キリストが強調されているが、イエス・キリストと神又は聖靈の關係が充分三一論的に理解されていまいらみがある。こゝに於いても彼の重なる関心は教義学的な議論を伝統的な神学のわくの中で比較検討し乍らなすことにあるのではなく、むしろ新しい表現や言葉を用いてさえも、イエスによつて表現された贖罪愛を語ることに彼の努力が集中されていたことを我々は知るべきである。

- (1) Songs From the Slum, pp. 82-83
- (2) 横山春一、賀川豊彦伝 増訂版 一九五九、二頁
- (3) 賀川豊彦の著作は極めて多岐にわたたり、一九五九年七月十日に出された「空の鳥に養われて」に至るまで合計一七一を数えることが出来る。この中日本語、一三九、日本語にない英書五、共著五、翻譯二二を数えることが出来る。
- (4) Brotherhood Economics 1937, p. 43
- (5) William Axling, Kagawa, First Edition 1932, Revised Edition, 1946 pp. 93-94
- (6) New Life Through God, 1931 p. 30
- (7) 十字架をめぐつての瞑想、一九三一、五三頁

- (8) Love, the Law of Life, 1929, p. 56
 - (9) イエスの宗教と其真理、一九二二、二四頁及び四一頁
 - (10) 社会革命と精神革命、一九四八、一〇八頁
 - (11) 同右書第六章「歴史を通して神を見る」一一九頁以下
 - (12) 同右書一二四〜一二五頁
- (13) High Christology

二

賀川豊彦の神学に於て、神と人とを結び又社会における人と人とを結ぶ概念として特に用いられている表現は意識という言葉である。彼は意識に無意識、半意識、全意識の三つの段階のあることを説いている。⁽¹⁾ 無意識の段階に於いては、人はその行為の意味を充分意識することなく自然的本能に従って生きる。半意識の段階において倫理的なめざめがなされ、自己の罪の贖の為に代りとして小羊をさぐげたユダヤ教の慣習が例として用いられている。そして第三の全意識の段階においては人間の捧げられるいけにえは不充足であることが意識され、神自らキリストにおいていけにえとしてその生命を捧げることが示されている。他者の罪の為に自らの生命を捧げることがこの段階においてなされる。之を彼は神の意識 (God's Consciousness) 十字架意識 (Cross Consciousness) 又は贖罪意識 (Redemptive Consciousness) と名づけている。後にも見る様に之が社会における人間と人間を結ぶ概念としては連帯意識と呼ばれており、彼の倫理学の中心的な概念となっている。「意識」という心理学

的表現の中に神の愛を捉えようとする努力は、彼がその研鑽過程において心理学に多くを学んだ影響が見られると共に彼自身が幼少の時より、妻の子として生を受け、絶えざる苦難と葛藤の中に闘つて来た彼の内的な体験から把握され、表現されたものであると思う。

賀川豊彦の基督教信仰の中心をなすものはキリストの十字架にあらわれた神の贖罪意識である。彼の贖罪論はこの点において代理論 (Substitutional Theory) の色彩が強いと言えらると思う。他者の罪のゆるしの為に他者の受くべき苦難を自らに負うところに十字架意識がある。

「天地には、悪を救わんとする意識がある。悪を修繕せんとする愛に目醒める。——これは本能にも道德にもない。全意識的に宇宙全体の神が、悪人に対する責任を持ち、救わんとする思召を連带的に自覚する。それがイエス・キリストの『新約』としてあらわれているのである。健やかな者を救わんとするのではなく、悪人を救い罪あるものを救わんとするため、とイエスは言っておられる。これは半意識的道德状態では気づかぬことである。」⁽³⁾

このイエスの贖罪意識が神と人とを結ぶ紐帯であると共に、社会的連帯意識又は責任意識として人と人とを結ぶ紐帯となっている。⁽⁴⁾ 社会的運動の促進に当つても革命に反対し代つて他者の欠陥を負い他者を救う十字架意識を強調する所以がこゝにある。この十字架意識は個人主義的なものでなく、個人と個人とを結ぶ社会的連帯意識である。

「愛は個人を超越する。それは個人を通して働く社会的意志である。広く言えば、人格を貫く宇宙の意志である。……愛は社会を結ぶ力である。それは社会を内側から結ぶ力を持つ。」⁽⁵⁾

賀川豊彦はこの宇宙的愛の完全なる顕現をキリストの十字架に見出ししている。こゝに「キリスト教は十字架

の宗教である」という表現が彼の諸著に屢々用いられている意味がある。(6)

彼によるなら我々が意識にめざめるときに、この十字架意識を受容することが可能であり、そのときにキリストは聖なる社会秩序の頭として仰がれるのである。(7)

そこにかゝる社会秩序の建設の為に愛の必要が説かれ、犠牲が愛の基礎として必要なことが語られている。この十字架意識が我々の中に反映されぬとき、我々は社会的建設をなすことは出来ないというのが賀川の強い確信である。(8)

こゝで注目すべきことは十字架意識がキリスト教の本質であると共にキリスト教倫理の中心の命題であることである。彼にとつてはこの世に神の国を来らせる為に、この十字架意識がどうしても実践されねばならない原理であり、又同時に誠命である。彼がその著書のタイトルに用いている様に彼にとつては愛は生命の律法 (Love, the Law of Life) である。こゝに彼の倫理学の方法論に於て誠命論的性格がその根底に存していることが窺えるのである。そして十字架意識は人間の破れや相対的な限定をはるかに越えたものであるにも拘らず、社会建設の誠命的原理としてその実践が強調されるととき、幾多の困難が少じて来る。絶対的の自己犠牲に立つアガペーの道を社会生活の中に人が実践することとは確かに望ましい道であるが、人には至難な課題である。彼が横々にして挙げる西欧社会とくにデンマーク、スエーデン、イギリス等における社会意識は長い歴史の中に、キリスト教的精神の加ったものであることを認めるにやぶさかではないが、そこには可成り、対岸の風光の理想化がみられると共に、原理的には神の愛と人の愛がやゝ同一次元におかれて論ぜられ、完全なる十字架意識が神においては可能であったことが、直に人への誠命となつてむけられており、人間におけるその実現の限界性が現実的に把握されていない憾がある。一言で言えば賀川豊彦の基督教倫理において終末論的性格が稀薄なのではないかという問題が提起される

わけがこゝにある。このことは彼の倫理が社会倫理へと展開されるときに一層顕著にあらわれて来ると思う。そして基督教倫理の原理的把握においては十字架意識に基づく誠命論的性格が社会倫理の展開に於いてはこの全意識を媒介として理想の社会秩序へと上昇する目的論的な性格をますます強くして来ているように思う。

- (1) *Meditations on the Cross*, pp. 24—25
- (2) 彼はプリンストン大学留学中第一年目にマスター・オブ・アーツ(文学修士)のクレデットをとっているが、その主論文は実験心理学についての論文であった。横山春一、一九五九年版、一一二頁
- (3) 社会革命と精神革命、八七頁
- (4) 十字架に就ての瞑想、二六頁
- (5) *Love, the Law of Life*, p. 117
- (6) *New Life Through Christ*, pp. 71 ff., *Brotherhood Economics*, pp. 31 ff. 十字架に就ての瞑想、九頁、社会革命と精神革命、一三〇頁
- (7) *Meditations on the Cross*, p. 95 “He is the Head of a Divine Social Order.”
- (8) 同右書、三四頁

三

賀川豊彦の倫理学の原理としてイエスの十字架に見られる贖罪意識が中心となっており、人と人とを結ぶ連帯意識がこゝにとらえられ、これが社会建設にあたって不可欠の誠命であることを指摘して来た。われわれは次に賀川豊彦において、社会倫理がいかに展開されているかを考察したいと思う。

賀川豊彦がゴールゲート・ローチェスター神学校において一九三六年四月になしたラウシエンブッシュ記念講演に於いて、「キリスト教の本質である十字架意識の原理が経済活動の本質とならなくてはならない。」と語っている。彼にとっては、現在の経済的危機の原因は人々の間に社会的連帯意識が欠如していることである。現在の社会的混乱を慨嘆した後彼は言う。

「こうした混乱に、社会的連帯意識性は寸断せられ、群を離れて反社会性に泣く不良少年もあれば、階級闘争に名をかりて、侵略戦争に出る者もある。どうしてかゝる混乱が社会生活に起ったかと聞く人があるだろう。その答は簡単である。自由意志が、社会連帯意識性の軌道をふみはずした為であると云うより他はない。もしこの連帯意識の線よりはずれた者に対しても超道徳的な努力を持って、もう一度社会生活に引きもどしてやろうという贖罪愛的指導をおしまないものがあるとすれば、その時にこそ社会生活は意識的に最高の頂点にまで達したと言いうるだろう。この高度の社会意識が発達して、始めて真正な社会構造が生まれるのである。」⁽²⁾

この点において人格的社會連帯意識性を強調する宗教運動は經濟運動であり、經濟運動は宗教運動である。⁽³⁾ 彼は個人と社會、信仰生活と社會生活・宗教と道德の二元論に強く反対する。両者は社會連帯意識性の中に一つとして結合されている。

賀川は經濟の目的を次の様に定義している。

「經濟と云うものは、『物質』を仲介物にはするけれども、その目的は生命及勞力の維持、發展補修にある。生命は勞働を通じて、心理生活の向上⁽⁴⁾をその目的とする。」

彼は価値と云うものは或る「目的」の為に發生するものであることを説き、その目的に次の七つあることを

挙げてゐる。(一)生命 (二)力 (三)変化 (四)成長或は行程 (五)選択 (六)法則 (七)合目的性⁽⁵⁾

後に指摘する様にこれら七つの目的的価値が彼の経済構造において主要な要素となっている。而して先きにあげた十字架意識がこれら七つの価値の源として考えられている。

賀川豊彦における七つの経済的価値

価値の要素	聖書	経済生活への適用	用 例
1 生命	マタイ 6 : 25	保 險	生命の保持
2 労働	ヨハネ 5 : 7	生 産 者	労働尊重生産
3 変化	マタイ 13 : 44 45	市 場	交換と流通
4 成長	ルカ 13 : 19	信 用	生産の増大
5 選択	マタイ 18 : 8	相互扶助	職業補導
6 秩序	ヨハネ 13 : 34	公共利益	社会的立法
7 目的	マタイ 5 : 48	消 費 者	保 險

本表は Brotherhood Economics の 26~31 頁及び 41 頁以下の叙述から編したものである。

「十字架意識はこれらの経済的価値の七つの要素を含むものである。それはほろびゆく生命を救うものである。それは失われゆく力を贖うものである。それは罪にけがれた魂に真理にある自由を与えるものである。それはすたれた心に神の国の成長の力を新らたにするものである。それは、失われたものを選択の力を与える。それは混乱の中にあるものに正しい秩序を与える。そして最後にそれは生の目的から遠ざかったものを愛をもって救うのである。」⁽⁶⁾

彼はこれらの七つの目的的価値の根柢を聖書に求めそこから経済生活への適用を見出そうとしている。これは上の様に表示してみることが出来ると思う。

こゝで問題となることは聖書の中に記されている永遠と時間の関係をあらわした宗教的価値が直ちに経済生活の原理となつて用いられていることである。そこに垂直的な関係と水平的な関係が一つとなつて用いられており、或る場合においてはそれらが混同されている感を否定することが出来ない。

賀川豊彦における基督教倫理

賀川豊彦はその神戸新川の貧民窟の体験から貧民救済には経済機構の改革の必要なることを悟り、労働組合運動、農業協同組合運動をおこし、消費組合運動を指導した。この分野において賀川豊彦が果たした開拓者としての役割は日本の社会運動史の中に高く評価されて然るべきであると思う。

然し私が今こゝに主として考察したい課題はそうした彼の実践活動を歴史的に叙述することではなく、彼がいかなる社会倫理に立ってそうした実践的活動を推しすすめて行ったかと言う問題である。凡て一人の人が社会的実践に励む場合、何らかの倫理的な動機から之に当って行くものである。前記の如く賀川豊彦の倫理の法論において十字架意識に根ざして社会的実践に当たったことが言える。しかしさらに彼の社会的活動についての理念を検討するときも一つの大切な契機が存在している様に思われる。それは右に挙げた七つの価値要素を成就するものとしての理想の社会秩序を実現するという目的論的な態度をそこに発見することが出来ると思う。彼は一面に於いて理想主義者と思われる位に、現実の苦難と悲哀を体験しながらも、一つの目的に向って進むことを止めなかった。悲観主義的見解を批判した後、彼はこう言っている。

「我々は神の国の建設を目標としている。協同組合運動はキリスト教の理想とする愛と兄弟愛の精神にかなったものである。」⁽⁷⁾

賀川は九つの理想の社会秩序の検討をなし、マルクス主義は財産を心理的に解釈しない為民衆の自由結社を妨害し経済的唯物組織で抑圧するおそれのあることを説き、国家社会主義は軍国主義に進む危険性をもち、サンチカリズムは生産者専横となり、過激派は無産者専制であり、無政府主義は世界を原始のアダム一人に帰さなければ無意味な仮説であるとし、財産の平等の分配を主張する分産主義は人間の主観性を無視したものであるとして排斥している。共産主義については「共産主義の様に財産は必ず共産でなければならぬと云う様に窮

屈なことは考え無いのである。富と云うものは主観価値の客観に投影しされたものである以上、それは心理的に言つて共産的であることは不可能である」⁽⁸⁾として批判している。更に「社会改良主義は嘗て社会を改良したことがないから、又今日の労働組合はあまりに無力であるから」として之を取るに足りないものとして⁽⁹⁾いる。彼はデンマーク、スエーデンの北欧の国に範を取り協同組合運動を主張している⁽¹⁰⁾。彼の理想の社会構造は右の九つの主義の長所を取り入れつゝ組合組織を単位としたギルド社会主義と呼ぶことが出来るかと思う。

Element Value	Types of Cooperative
1. Life	Insurance Coop.
2. Labor	Producers' Coop.
3. Change	Marketing Coop.
4. Growth	Credit Coop.
5. Selection	Mutual Aid Coop. (Educational, Professional and Social Welfare Coop.)
6. Order	Utilities Coop.
7. Purpose	Consumer's Coop.

「それで最後に残っている解決は、中世に欧州で行われたギルドの形式をもう一度新らしい形で現代に復活させ、進化させて、生産者の全人、全性、全霊の享樂を生産ギルドそのものの中に発見することである。……今日の複雑な社会組織にこの種の包含的なギルドは組織し得ないにしても、国家的な産業ギルドを労働者が自主的に支配し得る位は決して困難なことではないのである」⁽¹¹⁾

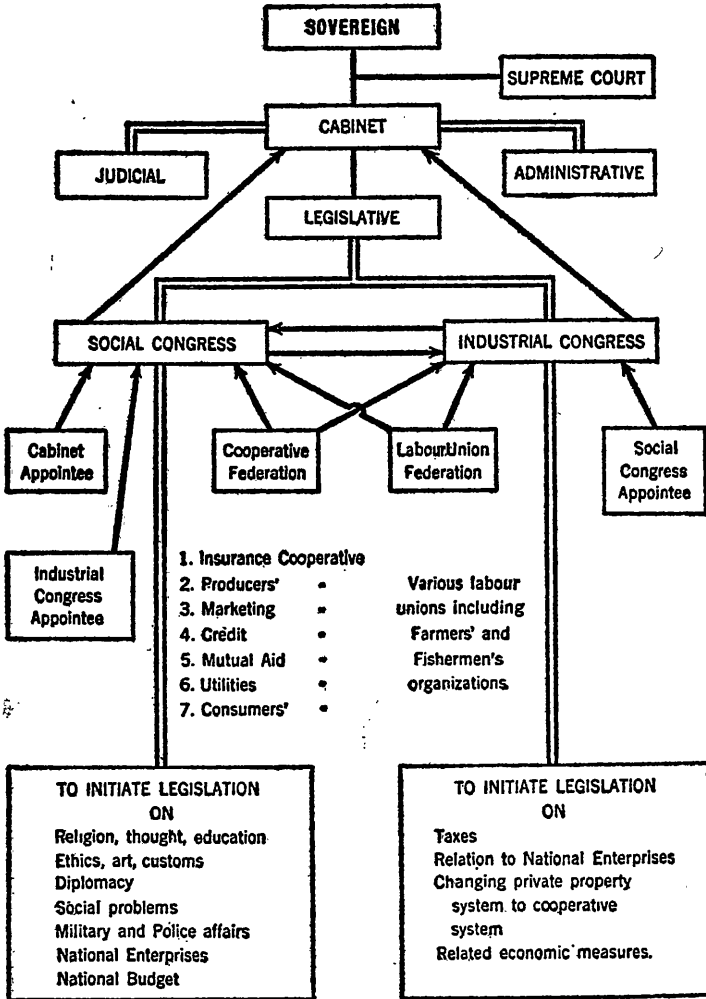
更にこの組合組織についていくつかの原則を彼は挙げてゐる。即ちその協同組合は(1)利益払戻 (2)持分制限 (3)人格経済の基本原則に基き一人一票の採決権によるものである⁽¹²⁾。

前記のラウシェンブッシュ記念講演の中にはこの協同組合国家の機構が次の頁にあげるような図式をもつて示されている。又さきに述べられた七つの価値の要素に従つて夫々協同組合が上述のように結成される。

賀川はこの理想の社会秩序を次の様に説明している。

GOVERNMENT OF A CO-OPERATIVE STATE

(Double lines indicate function.
Single lines indicate relationship.)



賀川豊彦における基督教倫理

cf. Brotherhood Economics, p. 168

「資本は必ずしもマルクスの如くに國家に集中しなくとも、生産者組合の手に委ねて、之を政府が監督し、足らぬ所は生産者と政府との連絡によって、他の資本の豊富な生産者組合から借り入れる様にし、凡ての人が、利己的精神を離れて社会連帯の責任を持つて動く様になれば問題は忽ちにして消失するのである。」⁽¹³⁾

そして、この理想的秩序がもたらされる為の先決問題は社会連帯意識性を人々の心の中に植えつけることである。⁽¹⁴⁾こゝで教育活動及び宣教活動の重要性が再び説かれている。

この場合彼の協同組合國家が一つの理想の社会秩序として指向されているのみでなく、宗教的な運動、即ち神の國の建設と一つになって同一次元上に結合されている。リチャード・ニーバーがキリストと文化の関り方についてあげた第二の類型「The Christ of Culture」⁽¹⁵⁾に挙げた内在論的な文化とキリストの同一視化の方向がそこにとらえられ、倫理学の方法論はこゝにおいては誠命論的性格より目的論性格を強くして来ることが指適されうらと思ふ。

- (1) Brotherhood Economics, p. 35
- (2) 人格社会主義の本質、一九四九、一六頁
- (3) 精神運動と社会運動、三八二頁
- (4) 人格社会主義の本質、一八頁
- (5) 人格社会主義の本質、二四頁及び Brotherhood Economics, p. 26
- (6) Brotherhood Economics, pp. 32-33
- (7) 同右書、一一三〜一一四頁
- (8) 主観経済の原理、一九二〇、一九二頁

- (9) 同右書、一九三頁
- (10) 人格社会の本質、六一頁、社会革命と人間革命、一六一～一六二頁、*Brotherhood Economics*, p. 134, p. 195
- (11) 主観主義の経済、三〇五～三〇六頁
- (12) 人格社会主義の本質、六〇頁、社会革命と精神革命、二四～二六頁
- (13) 主観経済の原理、二四〇頁
- (14) *Brotherhood Economics*, p. 106、社会革命と精神革命、一六一～一二六頁
- (15) H. Richard Niebuhr, *Christ and Culture*, Chapter III